

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 震災の後に 山岡洋一
 - 政治指導者は言葉で国民を動かし……
震災後に注目を集めている点のひとつに、政治と指導者のあるべき姿がある。とくに優れた政治指導者、ウィンストン・チャーチルの伝記を訳すにあたって読んだ本のなかで、とくに面白かった点をあげていく。
- モンゴルの翻訳事情 (4) 北村彰秀
 - 出版翻訳 (Chinese からのものなど)
中国で大ベストセラーになった「神なるオオカミ」のモンゴル語訳などを紹介する。
- おすすめしたい韓国の本 福田知美
 - 英語泥棒1
韓国で今高く評価されている英語学習漫画『英語泥棒 1』は、英語の勉強をするというよりは本当に読んで楽しむ感覚で英語を身につけられる内容になっている。
- 翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その11) 河原清志
 - 翻訳における原文からの事態構成：コア理論
英語の授業で、受け身形では行為者を by で表すと学校で習う。しかし、勉強が進むと、be interested の場合は in、be pleased の場合は with、be surprised の場合は at を用いると習う。なぜこういう心理的な表現の場合には by 以外の前置詞を使うのか。筆者の20年越しの疑問を解明する。

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

政治指導者は言葉で国民を動かし……

震災後に注目を集めている点のひとつに、政治と指導者のあるべき姿がある。リーダーシップ論や、優れた政治指導者の伝記が、いま読みたい種類の本のひとつであることは間違いないだろう。幸い、ポール・ジョンソン著『チャーチル』の著作権があてられていることが分かり、翻訳できることになった。その準備の過程でさまざまな関連本を読んでいる。以下ではそのなかでとくに面白かった点を紹介したい。いくつもの伝記や歴史書で語られていることなので、出典は示さないが、ご容赦願いたい。

1930年代後半、ヨーロッパ情勢が緊迫するなかで、イギリスのネビル・チェンバレン首相はドイツとの戦争を避けようと努力してきた。1938年には有名なミュンヘン会談でドイツによるチェコのズデーデン地方割譲を認め、平和が達成されたと宣言した。だが、長くは続かなかった。1939年3月にはドイツがチェコを併合し、9月にはポーランドに侵攻したからだ。チェンバレン首相は与野党議員の要求に押され、ドイツに最後通告を送り、その期限が切れたとき、宣戦を布告した。ラジオ演説で国民に開戦を伝えたとき、首相の声は悲しげだったという。

その後の半年ほど、ドイツ軍がポーランドの西半分を制圧するなど、ヨーロッパ大陸で勢力を拡大するなかで、イギリス政府の動きは鈍かった。世論は政府に厳しくなり、与党内でも首相退陣を求める声が強まった。

1940年5月7日から8日にかけて、下院で集中審議が行われ、与野党の議員が首相の責任を迫及している。与党のエメリー議員が首相を非難する演説を行い、ピューリタン革命の際、長期議會を解散させたときのクロムウェルの言葉を引用した。「諸君はさほどの実績もないまま、長く居座りすぎている。立ち去れ。もはや用はない。神の名において求める。出て行け」。野党自由党の長老、ロイド・ジョージはこう語った。「首相は犠牲を払うよう求めた。国民は、あらゆる犠牲を払おうとしている。だがそのためには、リーダーシップが発揮されていること、政府が目的を明確に示していること、指導者が最善を尽くしていると信頼できることが不可欠だ。わたしは厳粛に申し上げたい。首相が先頭に立って犠牲

を払うべきだと。首相がみずからの地位を犠牲にすること以上に、戦争の勝利に貢献できるものはないのだ」。

こうした演説が与えた影響は大きく、その後に行われた事実上の信任投票では、与党議員の多くが欠席するか、反対票を投じた。それでも80票の差で信認されたのだから、チェンバレン首相は職に止まることもできた。しかし、未曾有の国難を乗り切るには挙国一致内閣を作るしかない。与党内の反対派や野党に連立内閣への参加を呼び掛けたものの、拒否された。

チェンバレン首相は退陣を決めて、後任を選ぶことにした。どのような方法でどういう人物を選んだのか。党大会か議員総会で選挙を行い、若手指導者への世代交代を進めたのだろうか。そうではない。密室の協議で、年下ではあるが、65歳とかなり高齢のチャーチルを選ぶことを決めたのである。チャーチルは第1次世界大戦のときの海軍相、1920年代に金解禁を実行した財務相など、要職を歴任してきた政治家だが、1930年代には過去の人だとされていた。第2次大戦の開戦の直後に海軍相に就任し、ようやく復活してそれほど時間がたっていなかった。父親は第7代モールブラ公爵の息子であり、領地の選挙区で選出された下院議員として首相の座を狙ったほどの大物政治家なので、典型的な世襲議員でもある（ちなみに、子も孫も下院議員になっている）。表面的には、古い時代を代表する政治家だともいえる。

だが、こうした点はどれも問題ではない。未曾有の危機にあたってどういう政策と目標を掲げているのか、目標を達成できる覚悟と力量があるのかだけが問題なのである。チャーチルがえられたのは、圧倒的な軍事力をもつドイツとの正面衝突を避けたかったチェンバレン首相とは違って、戦う意思を明確にしていたからだ。そして、それだけの覚悟もあった。首相に就任し、主要政党の最高幹部で構成される戦争内閣の組閣を終えた日の夜、こう感じたと後に記している。

わたしは深く安堵した。ついに、全体を指揮する権限を与えられたのだ。わたしは運命とともに

歩いているように感じた。それまでの生涯はすべて、このとき、この試練のための準備にすぎなかったと感じた。……戦争についてはよく分かっていると感じていたし、失敗することはないと確信していた。だから朝が待ち遠しかったが、ぐっすり眠れた。元気づけてくれる夢など必要はなかった。事実は夢に優るのだ。

長年の夢だった首相の座を射止めたのだから、こう思うのも当然だと思えるかもしれない。だが、この日に、ヨーロッパ戦線が急転していた。この日の朝、ドイツ軍がオランダとベルギーに奇襲攻撃を加え、戦局が急激に悪化したのだ。チェンバレン首相は事態の急変を受けて退陣を撤回しようとしたが、こういう危機だからこそ首相の交代が必要だとする与党幹部の説得を受け入れ、夕方になってチャーチルが首相に就任することになったのである。その後数日で、オランダとベルギーが降伏し、ドイツ軍機甲部隊がフランスに進軍する事態になった。たいていの人物なら、とんでもない貧乏くじをひいてしまったと嘆くはずだ。こんな状態で朝が待ち遠しいと感じられるのは、本物の指導者、危機にこそ力を発揮する指導者だけだろう。

3日後、チャーチル首相は下院で短い演説を行った。「わたしが提供できるのは血と労苦と涙と汗、これら以外に何もない」という言葉で有名な演説である。この演説で、政府の政策と目的をこれ以上はないほど明確に表明している。「政策は何かと問われるであろう。わたしはこう答える。戦争を遂行すること、海で戦い、陸で戦い、空で戦い、力の限りを尽くし、神に与えられた力をすべて使って戦い、人類の犯罪の暗くて酷い歴史にも類をみないほど非道な圧政と戦うことである。これが政策である。目的は何かと問われるであろう。この問いには一言で答えられる。勝利だ」と。いかなる犠牲を払っても、いかなる恐怖に襲われても、いかに長く、困難な道であっても、勝利を収める。これが目的だ。勝利しなければ、生き残ることはできないのだ」

フランスが降伏した直後の6月18日、チャーチル首相は下院で演説し、イギリスがすぐにドイツに屈服するとの見方を強く否定した。最後にこう述べている。

ウェーガン将軍がいうフランスの戦いは終わった。イギリスの戦いが間もなくはじまる。この戦いに、キリスト教文明の生き残りがかかっ

ている。われわれイギリス人の生活が、命がかかっている。われわれの体制と帝国の存続がかかっている。敵は凶暴な力を、間もなくわれわれに向けてくる。ヒトラーはこの島でイギリスを打ち破らなければ戦争に負けることを理解している。われわれがヒトラーに立ち向かうことができれば、ヨーロッパ全体が自由になり、世界全体が光り輝く広大な高地に進めるだろう。だがわれわれが敗北すれば、世界全体が、アメリカも含めた世界全体、われわれが慣れ親しみ、大切にしてきたものすべてが、新たな暗黒時代に落ちこむだろう。それも、科学の悪用によって、もっと悪質で、おそらくはもっと長期にわたる新暗黒時代に。それ故、決意を固めて義務に取り組み、大英帝国と英連邦が1000年続いたとしても、「これこそもっとも輝かしいときだった」と語り継がれるようにしようではないか。

同じ姿勢は、たとえば1941年10月29日に母校のハロー校を訪問したときの演説にもみられる。この演説は「絶対に屈服しない。絶対に屈服しない。絶対に、絶対に、絶対に、絶対に」という言葉で有名だが、締めくくりの部分も魅力的だ。「暗い日々と語るのはやめよう。厳しい日々だといおう。いまは暗い日々ではない。偉大な日々、われわれの国にとってかつてないほど偉大な日々なのだ。われわれはみな、神に感謝しなければならない。一人一人がそれぞれの持ち場で、この日々をわが民族の歴史で長く記憶されるようにする動きに参加することを許されているのだから」

これらの演説を読んでいくと、政治家とは何か、政治指導者とはどのような役割を果たす人物なのかが見えてくる。政治家は言葉で国民を動かす。未曾有の危機のなかで進むべき道を指し示し、国民の士気を高める。素晴らしい役割であり、うらやむべき役割である。だが、人にはそれぞれ持ち場がある。翻訳者には翻訳者の持ち場があり、文章で読者に感動を与え、深く考えるきっかけを与えることができるのである。こういう役割を与えられたことを、天に感謝しなければならない。

出版翻訳 (Chinese からのものなど)

前回の原稿で、「龍の子太郎」について触れたが、「竜」の字を用いてしまった。「龍の子太郎」がより正確な書名であると思うので、「龍の子太郎」と訂正したい。ご迷惑をおかけした方々にはこの場を借りてお詫びしたい。

「龍の子太郎」のモンゴル語訳旧版は 1976 年に出ているが、新版の訳文は旧版とほとんど変わっていない。改行の位置等が多少変わっている程度である。また、挿絵は旧版の方がよい。原文の日本語と多少違っているところが多く、また、植物名でロシア語が出てくるので、ロシア語訳からの重訳と見てよいであろうと思う。ロシア語版は 1971 年に出ているので、それから 5 年後の出版ということになる。原文は、子供向けながら、方言の要素もある、かなりむずかしい文章なので、これを独力でモンゴル語に訳せるほどのモンゴル人は、いないであろうと思う。(原文が困難なためか、この作品の英訳はまだ出ていないようである。)

想像上の動物や怪物等の取り扱いについては、この作品の翻訳でも多少問題があると思う。鬼はモンゴル語の、多くの場合「悪魔」と訳される単語に訳し、また、天狗は日本語のままとし、注を付けている。旧版の挿絵では、鬼も天狗も問題がないと思うが、新版の挿絵では、天狗は鳥の姿をしているし、鬼はまさにブリキのおもちゃである。(民主化以前にはモンゴルには高い技術があったし、立派な職人、専門家もいたと言われる方がいるが、ある面ではそのとおりであると言わざるをえない。) また、閻魔は日本語のままである。モンゴル語には閻魔を意味する *Erlig* という語があり、この単語を知っている人は少なくないはずである。知ってはいても、対応する日本語の単語との同定ができなかったものと思われる。

「ホテル・ウランバートル」という本についても触れておきたい。この本は、工藤美代子著、1990 年に作品社という出版社から出ているが、モンゴルの民主化を扱ったものである。この本もモンゴル語訳が出ている。ただし、かなりお粗末な製本であり、また、字を小さくして、印刷費用を安く抑えているようである。

とにかくモンゴルでは、一般のモンゴル人の平均月収に比べて本の値段が非常に高い。あまりお金の少ない学生のころこそ、多くの本を読まなければならないはずである。本の著者、あるいは翻訳者として

は、できるだけ立派な本を出したいと思うであろうが、普通の学生にも手の届くような本を出すという発想を、もっと多くの方に持っていただきたいと切望する。モンゴル語訳「ホテル・ウランバートル」のような、安くあげた出版物を、わたしとしては応援したい。

先月の原稿で紹介したトゥムルバートル氏は最近、日本の作家の作品集のモンゴル語訳を出している。これに含まれている作家は川端康成、芥川龍之介、森鷗外などである。この本の表紙は着物を着た女性の絵であるが、あまり違和感のないものである。トゥムルバートルの本(今のところ 3 冊しか見ていないが)の表紙は、いずれも悪くないと思う。彼は 1997 年にモンゴル翻訳者同盟の賞を受賞している。

Chinese からの翻訳では、近代以前に訳されたものはここでは触れず、現代のものに限って述べるが、古典では、論語、大学、孫子兵法などの翻訳が出ている。以前に毛沢東語録の内モンゴル版と外モンゴル語版が出たことがあったが、これはモンゴル国ではなく、中国の出したものである。また、最近中国で大ベストセラーになった「神なるオオカミ」(原題は直訳すると「狼トーテム」)がモンゴル語に訳され、現在(この原稿を執筆時点で)文学部門ベストセラーの第 1 位である。モンゴル語版の書名は「トーテム」という語を避け、「狼の魂 (su'ld)」としている。この作品は、内モンゴルを舞台としているが、遊牧の様子などは、外モンゴルも本質的に同じと言ってよいであろう。主人公は漢民族の青年であるが、モンゴル人の生活、習慣等を描いているため、モンゴル語訳が出るのは当然といえば当然である。漢民族がモンゴル民族を好意的に描いているという点も注目に値する。漢民族に属する主人公は、モンゴル人の教育や医療に従事するのではなく、モンゴル人とともに遊牧生活を体験し、モンゴル人から学ぼうとする。それゆえにこそ、モンゴルにおいても、多くの読者を獲得しているものと思われる。モンゴル語訳を読んでいると、モンゴル人が書いた小説ではないかと思われるほどであり、モンゴル人には読みやすいものになっていると思う。(日本語では、この作品を短くした「小狼小狼」、日本名は「大草原のちいさなオオカミ」という本も出ている。) 美しいモンゴルの自然、魅力的なオオカミの世界、大自然とどう向き合うかという問題等々が書かれていて、モンゴル人にとっては、読まずにはい

られない作品である。モンゴル語版では表紙の一部に著者（と思うが）の写真があり、また、著者自身が序文を寄せているというサービスぶりである。また、値段が低くおさえられているようであり、その点もありがたい。この作品や「大草原のちいさなオオカミ」については、すでにネット上で、いろいろな紹介記事や感想が日本語で出ているので、詳しい内容についてはそちらにゆずりたいと思う。

この作品の著者は国籍は中華人民共和国、民族は漢民族に属する。著者はまず何よりも、自国民に対し、特に漢民族に対してこの作品を提供している。それゆえに、Chinese で書かれたことに意義があるといえよう。モンゴル語に訳されたものをモンゴル人が読む場合には、この作品はモンゴル人の誇りや、遊牧社会の伝統を扱ったものとして読まれるであろう。また、モンゴル人やモンゴルの伝統に深い理解を示した姜戎（ジャンロン）という著者が特に注目されるであろう。しかし、漢民族の読み方は異なってくるはずである。漢民族の読者は、例えば中国の辺境地域の文化を再評価したいと思うかもしれない。モンゴル語や日本語に訳されても、原作のかおり高さは失われなと思うが、作品の訴えるメッセージが微妙に変わってくることは避けられないであろう。

どんな作品であれ、翻訳という形で、あるいはそのままの形であっても、原作とは違った環境に移された場合には、原作が出版された（あるいは出版されようとした）時期、場所、読者集団におけるその作品の与えるインパクト、作品の任務といったものをそのままの形で再現することは困難になる。もちろん説明することはできるが、再現することはできない。これが翻訳という仕事の1つの限界と言わなければならない。「狼トーテム」もモンゴル語翻訳では、原作とは多少異なった「狼の魂」となって生きていくものと思う。

しかしまた、文学というものは、時代、民族や言語が違って理解しうる共通語としての要素を備えているということも、やはり同意せざるをえない。この作品はモンゴルを舞台とし、モンゴル民族を扱ってはいるが、この作品のテーマとしている多くの問題（ここではあえて述べないが）は、人類共通のものである。この作品が中国、モンゴル、日本その他の国々の多くの読者に読まれることを期待したい。

付記 1

4月号の原稿で、想像上の動物、怪物等の事典が必要と書いたため、多少責任も感じ、また、必要も覚えて、適当なものがあるかどうか探してみた。よいと思われるものがあつたのでここにあげておきた

い。

キャロル・ロース著、松村一男訳「世界の妖精・妖怪事典」原書房 2003 年

キャロル・ロース著、松村一男訳「世界の怪物・神獣事典」原書房 2004 年

この2冊には、非常に詳細な説明が含まれている。（もちろん善玉か悪玉かということも書かれている。）また、扱っている範囲は英語圏だけではなく、ヨーロッパから China、さらにはチベットにまで及ぶ。さすがにモンゴル固有のものとは扱っていないが、モンゴル人になじみの深いインドの龍やチベットのガルダなども、よく探してみると、出てくる。（なお、このような本について述べるわたしの意図は、翻訳者の仕事への寄与、また、外国文化理解への寄与となればという思いであり、それ以外にないこともことわっておきたい。）

付記 2

中国という言い方は本来、地域ではなく、国を指すものであり、過去の歴史を述べたり、いろいろな地域について述べる際には、非常に使いにくい語である。そのため、わたしの原稿では、場合によってはあえて英語で China と記し、また、中国語も場合により、Chinese と記した。

お知らせ

拙著「東洋の翻訳論」、「続 東洋の翻訳論」、「東洋の翻訳論Ⅲ」は下記の書店で扱っております。各冊とも 735 円（税込）という安価ですのでぜひお求め、お読みください。

(株) 朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町 8 番地

TEL : 075-761-1285

FAX : 075-761-8150

メールアドレス hoyu@hoyubook.co.jp

なお、本の内容は以下にあるとおりです。

homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/ron/bn/toyo3.html

英語泥棒 1

ここでは、私が興味深いと感じた韓国の本や今、韓国で話題の本を毎月紹介していく。この記事を通して、少しでも多くの読者の方に韓国の良書を知っていただき、韓国に親しみを持って頂ければ嬉しく思う。今月は学習漫画『英語泥棒 1』を紹介していく。

本書の概略

本書は韓国で今高く評価されている英語学習漫画である。現在は3巻まで出版されており（2011年6月現在）、中身はオールカラー。『英語泥棒』シリーズの特徴は、ストーリーを楽しみながら英語の読み書きと聞き取り、そして会話が学べる点だ。各巻に初級・中級の英単語と英文が100以上収録されており、必須英単語から日常会話まで学習することができる。登場するキャラクターもかわいらしく、ストーリーも他の漫画に引けを取らないくらい質が高い。英語の勉強をするというよりは本当に読んで楽しむ感覚で英語を身につけられる内容になっている。

あらすじ

ドドとアルルは戦士の聖殿の近くにある遺跡で謎のブレスレットを見つける。その瞬間、突然現れた正体不明の敵からブレスレットを奪われそうになるがドドはそれを阻止する。するとブレスレットが突然輝き出し、ドドたちはこれまでの世界とは別の次元であるバーベルワールドに飛ばされてしまう。訳も分からずバーベルワールドにやってきたドドたちは、そのブレスレットが伝説の勇者だけに与えられるセント・キマスターであることを知る。

期待される日本での受け入れ

普通の漫画を読むような感覚で英語が勉強できる点が強みの『英語泥棒 1』は、日本で広く受け入れられると思われる。主な読者層はもちろん小学生だ。韓国の学習漫画が日本で翻訳出版されて成功を収めた例が、実は過去にある。教育出版専門会社「未来（ミレ）エヌ」の児童・青少年出版ブランド「アイセウム」が出版した「サバイバルシリーズ」が、2011年の上半に日本市場で累積販売部数50万部を記録したのだ。「サバイバルシリーズ」とは、極限状況に直面したキャラクターたちが生き残るために使うさまざまな方法を科学の観点から解いた学習漫画のこと。日本で出版されたシリーズは20種類を超え、『異常気象のサバイバル』、『海のサバイバ

ル』、『山のサバイバル（筆者が翻訳）』などがある。中でも『地震のサバイバル』は今年3月に日本書籍販売サイト「アマゾンジャパン」で児童学習分野1位となった。「サバイバルシリーズ」が大きな売り上げを達成できた理由は、日本の学習漫画が白黒で「学習」に焦点を合わせている一方、韓国のそれはオールカラーでエンターテインメントの要素が強いからだという。

今回紹介している学習漫画『英語泥棒 1』も「サバイバルシリーズ」同様、エンターテインメント的な側面が強い。さらに子供たちが学校生活を送る上では欠かせない英語を扱っている点も日本での受け入れにプラスに働くのではないだろうか。ちなみに本書にはリスニング用のCDが付属しているのではなく、ホームページにアクセスしてリスニング用mp3ファイルをダウンロードできるようになっている（このような点も実に韓国らしい）。このシリーズには他にも『数学泥棒』や『科学泥棒』などもあるので、また機会があればここでご紹介したい。

題名：英語泥棒 1
 原題：영어 도둑 1
 頁数：本文 168 頁／英語の実践テスト 7 頁
 著者：文・オレパルグム（오래밖음）
 絵・ヤン・ソンモ
 出版社名：ソウル文化社
 発行：2010年11月29日



翻訳における原文からの事態構成：コア理論

英語の授業で、受け身形では行為者を by で表すと学校で習う。しかし、勉強が進むと、be interested の場合は in、be pleased の場合は with、be surprised の場合は at を用いると習う。高校1年が終わった春休みに、高校の英語の先生に、なぜこういう心理的な表現の場合には by 以外の前置詞を使うのか、と質問をしたところ、「それはキミの休み中の課題だね」とおっしゃった。まさに、この疑問は筆者の英語に対する初めての根源的な問題提起だった。

あれから 20 年。本稿のような理屈で説明が可能になった。手前味噌で恐縮だが、（途中、落語と法学に没頭した 10 年はあるが）20 年越しで疑問の解明ができたことを今でも素直に嬉しく思う。

そこで本稿では、些かノスタルジアに浸りつつ、前号の語彙文法論（Lexical Grammar）の基になっている語彙のコア理論（core theory）の考え方を紹介する。（以下は拙著「英語『形容詞＋前置詞』の共起性に関する意味論」『麗澤大学学際ジャーナル』第17巻第1号：pp. 13-25、2009年を加筆。）

翻訳を念頭に置いた場合、英日語における形容詞自体の性質の違い、前置詞と助詞の違いなどの論点も扱う必要があるが、それは論を改める。

* * * * *

1. はじめに

従来の英語教育において、イディオムはただ暗記の対象として、2 語以上から成る 1 つの意味のユニットに日本語による訳語を当て、学習者に記憶させていた。そこには意味論分析によるイディオムの意味構造の説明も、第二言語習得上のイディオム学習の方略も不在である。

そこで本稿は、認知意味論を基盤として、「形容詞＋前置詞」として一般にとらえられているイディオムを語彙意味論の観点から分析し、2 語が共起してコロケーションを形成する仕組みと、特に特定の形容詞が特定の前置詞を選択して語義確定（disambiguation）を引き起こすイディオムの仕組みを記述し、以って効率的なイディオムの習得に役立てることを目的とする。

2. 従来の「形容詞＋前置詞」の扱い方

2.1 学習参考書による記述

従来は「英熟語」という名である程度慣用化したと認められるコロケーションを単に列挙し、それに

日本語訳と用例をつけて「英熟語帳」として暗記させるという指導方法が取られている。「形容詞＋前置詞」についても同じで、学習参考書には例えば以下のような列挙がなされている。

- 「be＋形容詞＋前置詞」：be aware of, be ignorant of, be capable of, be famous [well-known] for, be noted for, be fond of, be good at, be poor [bad] at, be rich in
- 「2 つ以上の前置詞をとる形容詞」：be concerned about [for, with], be familiar to [with], be tired from [of], be impatient at [for]
- 「by 以外の前置詞をとる受け身」：be interested in, be known to, be satisfied with, be surprised at, be pleased with, be caught in
- 「be＋形容詞＋to 不定詞 /前置詞」：be afraid to [of], be ashamed to [of], be anxious to [for, about], be bound to [for], be content to [with], be curious to [about], be eager to [for], be ready to [for]
- 「be＋形容詞＋to 不定詞」：be apt to, be liable to, be likely to, be willing to, be inclined to, be obliged to, be compelled to, be supposed to, be about to

このリストは確かに形容詞と共起する語の違いに着目して分類している点で評価できるが、それ以上の意味分析や意味構造の解説まで踏み込んで説明が施されていない点で、単なる暗記の対象として列挙されているにとどまり、これでは学習方略が立たない。そこで、効率のよい学習方略を構築するために、まずは言語学による先行研究について見てみたい。

2.2 「形容詞＋前置詞」に関する先行研究

安井・秋山・中村（1976）は、「補文を伴う形容詞句構造」という章の中の「形容詞＋前置詞句」という節で同じ論点を取り上げている。簡潔にまとめると、以下ようになる（安井・秋山・中村 *ibid.*, pp. 205-212）。

- 構造面からの分類
 - 1) 2 つの異なる前置詞と共起し、その意味が変わらないもの
 - 2) 意味が異なるに従って異なる前置詞をとるもの
 - 3) 前置詞句を省略しても意味上あまり変化のないもの

- 4) 前置詞句がないと意味がまったくことになってしまうもの
- 5) 前置詞句が省略不可能であるもの
- 意味面からの分類
1. 「形容詞＋前置詞句」構造が他動詞に相当する場合
 2. 「形容詞＋前置詞句」のその他の場合
 - a. 性状の向かう主題を表す場合：at, about
 - b. 性状の及ぶ範囲を指定している場合：in, of, with
 - c. 性状の向かう方向あるいは対象を表している場合：to
 - d. 理由を表している場合：for
 - e. 主語と相対的關係にある対象あるいは付随を表す場合：with

これは「形容詞＋前置詞」の共起性に関して、構造面と意味面から網羅的に扱う試みとして評価できるものの、その背後にある原理が説明されていない点、また、意味面については上記7つ以外の前置詞について論及がない点、さらには例えば同じ「性状の及ぶ範囲指定」をする前置詞として3つ（in, of, with）掲げているものの、これらの使い分けの原理が明示されていない点で、「形容詞＋前置詞」の共起性の意味の核心に迫るには不十分である。

最近の研究では、「形容詞＋前置詞」の共起性に関する意味論を正面から取り上げたものではないが、丸田・平田（2001）が、形容詞の補部および形容詞の格特性について以下のように記している（丸田・平田 *ibid.*, pp. 90-97）。

- 形容詞の補部^{註1}について
- 1) 何も補部をもたない用法（例：The children are happy.）
 - 2) PP^{註2}補部を従えるもの（例：The children are happy with ice cream.）
 - 3) 節を従えるもの（例：The children are happy that they have ice cream.）
- 形容詞の格特性について
1. V、N、A、Pの語彙範疇^{註3}は、±V、±Nという統語素性の束によって定義され（Chomsky 1970）、Aは[+V, +N]となる（ここで、+Nとは格付与能力^{註4}がないことを意味する）。
 2. 文中に生起するNP^{註2}に対して格フィルター^{註5}という制限がある。これは具体的な形をもつ明示的なNP（例：the children, ice cream）は必ず格を1つ担うことを要求し、そうでないNPを排除するというものである。

3. 形容詞には格付与能力がないため、格付与能力をもつ前置詞が挿入されると、補部のNPには前置詞から格が与えられ、格フィルターの適用を免れることができる。
4. この場合の前置詞の意味的な選択制限は、主題役（of）、題材（about, over）、標的（at, with, in）、経験者（to）、着点（in, into）、起点（from）である（Rappaport 1983; Pesetsky 1995）。
5. 同一の述語にもかかわらず多様な前置詞を伴う補部が生起するが、これは形容詞の語彙に指定され、そこから特定のPの選択が帰結するという立場（強い語彙意味論仮説）はとらない。むしろ前置詞側にもそれぞれ、一定の固有の意味成分が含まれ、形容詞の意味に応じて適切に使い分けられていると考える。つまり、形容詞と前置詞の意味の融合（fusion）を仮定する。

これは形容詞と前置詞の共起性についてかなり核心に迫っている。特に、強い語彙意味論仮説は退けた上で、形容詞と前置詞の意味の融合（fusion）を仮定している点は注目に値する。確かに、強い語彙意味論仮説のように個別の形容詞によって後続する前置詞の選択が指定されるとすると、安井・秋山・中村（1976）が掲げる「2つの異なる前置詞と共起し、形容詞の意味が変わらないもの」（例：famous for と famous as）や、「形容詞の意味が異なるに従って異なる前置詞をとるもの」（例：anxious for と anxious about）というコロケーションの説明がつかないことになってしまう点で、前置詞側にもそれぞれ、一定の固有の意味成分が含まれ、形容詞の意味に応じて適切に使い分けられていると考えるほうが合理的である。

ところが、前置詞の意味的な選択制限に関して、上記の形容詞の格特性に関する4.で十分に前置詞の意味が説明されているか、疑問が残る。これは安井・秋山・中村（1976）に対する批判と同様であるが、例えば「標的（at, with, in）」において、これら3つの語の使い分けの原理は明確に提示されていない。

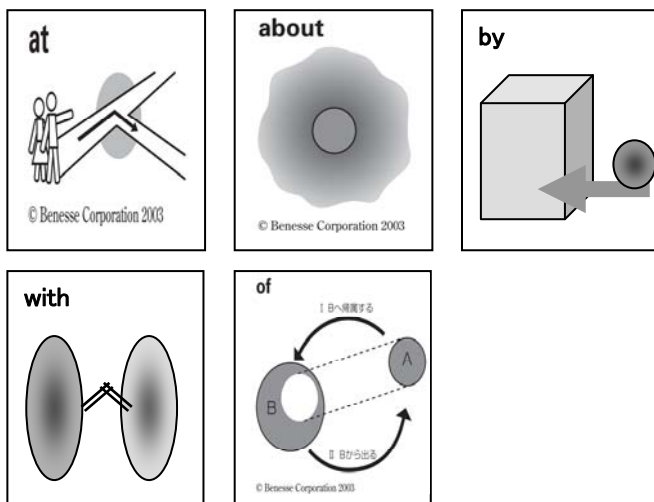
となると、形容詞と前置詞の意味の融合（fusion）を仮定した上で、形容詞と前置詞の意味構造の本質に根ざした議論を展開する必要が出てきそうである。そこで本稿では語の意味の本質を認知意味論の立場から論じている「コア理論」を導入したい。

2.3 「コア理論」からのアプローチ：感情表現に関して

「形容詞＋前置詞」のうちの「感情表現＋前置詞」に関して、認知意味論の分野での「コア理論」（田中 1990; 1997）から原理的に説明をしているものがある（田中・佐藤・阿部 2006, pp. 55-59）。コア理論とは、語には「文脈に依存しない (context-free or context independent) 意味」があり、実際の言語の使用場面においては、この文脈に依存しないコアが文脈調整を経て、文脈に依存した (context-sensitive) 「意味合い」 (contextualized meaning) を得る、というのがその主張である。この文脈に依存しない意味を「コア・ミーニング」 (core meaning) と呼び、これは人が様々な言語経験を経て語を習得する際にスキーマ化という抽象化を経て獲得される、単純で曖昧な意味^{註6}のことである。この理論によると、感情を表す形容詞と共起する代表的な前置詞は、以下のように説明される（田中・佐藤・阿部 *ibid.*, pp. 55-59）。

- **at** : コアは場の設定である、瞬間的な感情との結び付きで用いる。
- **about** : コアは周辺を表すため、周辺的な出来事がある感情の原因になる場合に用いる。
- **by** : コアは近接性を表し、「寄って」さらに「拠って」と意味展開する。感情が何かによって引き起こされる場合に用いる。
- **with** : コアは「…とともに」であり、一定時間継続する感情との結び付きで用いる。
- **of** : コアは「x of y において、x は y から出て、y に戻る」という出所性と帰属性であり、感情の直接的な出所を表す。

そして、これらのコア・スキーマを図式化すると、以下ようになる (at, about, of は『Eゲイト英和辞典』から、by, with は田中・河原・佐藤 2008 から引用)。



そして、8000 万語コーパスから析出した前置詞の選択傾向に関して、上記各前置詞と共起性の強い形容詞を次のように列挙している（田中・佐藤・阿部 2006, p. 58）。

- (1) at との共起性が強いもの : angry, surprised, disappointed, pleased, annoyed, embarrassed
- (2) about との共起性が強いもの : sad, mad, angry, anxious, pleased, embarrassed
- (3) by との共起性が強いもの : surprised, disappointed, pleased, satisfied, bored, annoyed, frightened, embarrassed
- (4) with との共起性が強いもの : mad, angry, disappointed, pleased, satisfied, bored, annoyed
- (5) of との共起性が強いもの : glad, proud, afraid, jealous

この「コア理論」による「形容詞＋前置詞」の意味の説明は極めて説明力が高いと思われる。例えば、丸田・平田 (2001, p. 96) が

- a. We are disappointed **about** the weather.
- b. We are disappointed **at** the result of the election.
- c. I am disappointed **in** our new teacher.
- d. ...the reader...will be disappointed **of** developing a personal taste.
- e. I am disappointed **with** my new bicycle.

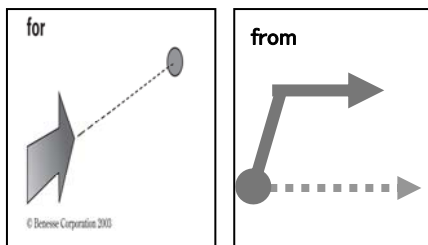
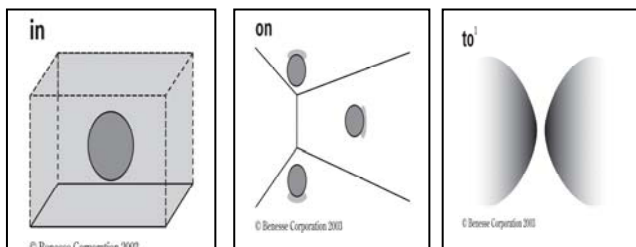
(強調は筆者)

(a)は、天気 (= 題材) についてあれこれ考えていて、結局あてが外れてがっかりした、ということである。(b)では、選挙結果は落胆の標的である。また、人物を標的にした落胆の場合は、(c)のように、通例 in が用いられるようである。(d)の of の場合は、「…をあきらめる」というような対象的な意味で、上で述べたとおり主題役を表し、感情の標的ではない。(e)は不満の標的を表している。

と説明している箇所に関して、なぜ about が題材、at が標的、in が人物の標的、of が主題役、with が標的をそれぞれ表象するのか説明していないし、同じ「標的」を表す前置詞間での意味の差異も原理的に説明していない。

ところが、「コア理論」に基づくと、次のような説明が可能である。(a)は about が周辺的な事情を表し、天気そのものではなく、天気に関して漠然とがっかりした感情を表している。(b)は at がその場で感じる瞬間的な感情を表し、選挙の結果を聞いた瞬

間立ち現われてきた失望感を表している。(d)は of が感情の直接的な出所を表し、個人的な好みが出来てくることから来る失望感を表している。(e)は with が一定時間継続する感情を表し、新しい自転車を一定期間使ってみてがっかりしている感情を表している。(c)に関しては、未出であるので、ここで本稿が取り上げる他の代表的な前置詞もあわせて、そのコアを記述しておこう (in, on, to, for は『Eゲイト英和辞典』から、from は田中・河原・佐藤 2008 から引用)。



- in : コアは「空間内」で、「…の中に」を表す。
- on : コアは「接触」で、面の接触や線状的な連続を表す。
- to : コアは「向き合った関係」で、「…とあい対して」いる状態を表す。
- for : コアは「対象を心理的に指差す」で、「…に向かって」いる状態を表す。
- from : コアは「物事の起点」で、「…から」を表す。

では、ここで(c)の説明をしておくと、in は空間の中を表し、disappointed という感情の原因が in で仕切られて範囲が限定されているのと同時に、内部を表象することでその本質に言及する表現だといえる。つまり、漠然とした感情の原因を表す about、その場で起きた感情の原因を表す at、原因の出所を表す of、継続した原因を表す with とは異なり、in はその目的語に本質的に内在する原因を表しているという解釈が、各々のコアから成立する。

この点、語の意味構造に迫るアプローチとして認知意味論の中には中心義から放射状に意義が展開すると捉える放射ネットワーク (radial network) という有力な考え方がある (Brugman 1988; Lakoff 1987; テイラー・瀬戸 2008)。意味構造の解明のために

意味論の立場からこの考え方に照らして分析しても、この形容詞+前置詞の意味的融合の事例に関しては、結果的にはそれほど差はない。例えば、of の中心義は「<全体>に部分として属する」であり、その派生義の1つとして「<物事>に由来して」という状態・行為などの出所を表す理由があり、この語義と disappointed とが融合して、「…から失望する」と考えても (瀬戸 2007)、コア理論を適用した場合と差はないかもしれない。

ところが、本稿が目指しているのは、第二言語習得上のイディオム学習の方略を構築することである。だとすれば、すべての派生義をマスターした学習者を想定したうえで、その派生義の1つと形容詞とが融合する、と考えるのではなく、前置詞の意味の本質を記述する「コア・ミーニング」から考えて、形容詞の「コア・ミーニング」と融合させることで、まだ学習が十分に進んでいない学習者が、「形容詞+前置詞」のコロケーションの意味を直感的に推測することができるというプロセスを示し、それを学習方略として提示するほうが、第二言語習得を想定した場合には効率的であるといえよう。この点、語の意味構造論としての語義のあり方と、第二言語習得上の教育装置 (pedagogical device) としての語義の考え方・学習のあり方とは峻別して論じたほうが適切で、前者はコア理論、放射ネットワーク論その他、各学説が対立していたとしても、第二言語習得を想定した意味構造論では、コア理論が説明力があると考えられる。

田中・佐藤・阿部 (2006) は「感情形容詞」に後続する前置詞として at, about, by, with, of の5つを例に挙げているが、これはもっと一般化できる可能性がある。上記のとおり、代表的な前置詞としてさらに in, on, for, to, from の5つを本稿は取り上げているが、これらすべての可能性についてここで検討し、形容詞と前置詞のコアの融合による説明が一般的に妥当することを考えてみたい。

例えば、surprised を事例として取り上げてみよう。検索エンジン google で surprised と上記 10 の前置詞とをペアで検索すると、以下の用例が出た。

- I was surprised **at** how large the city was.
- How incredibly silly it is for people to be surprised **about** the current situation of things.
- He's surprised **by** the outbreak of new violence.
- Rely upon this wonder-medicine and you will be so surprised **with** your size!
- Don't be surprised **of** being noticed.
- I got to admit I was very surprised **in** how he was able

to steal this thing.

- He told me he was surprised **on** how extremely courteous they were.
- Fans will be pleasantly surprised **for** what's in store.
- Just then His disciples came, and were surprised **to** find Him talking with a woman.
- I was surprised **from** a guy owning a Porsche.

(強調は筆者)

at, about, by, with, of の5つについては田中・佐藤・阿部 (2006) の説明がそのまま妥当する。つまり、都市の大きさを知った瞬間の驚きを at、現状の諸々の事柄についての漠然とした驚きを about、さらなる暴力が勃発したことによって引き起こされた驚きを by、ある薬を服用し続けて現われた効果としての大きさに対する驚きを with、気づかれるという出来事から直接来る驚きを of によって、それぞれ表している。

では、一般の英和辞典や英英辞典ではほとんど解説されていない形容詞+前置詞のコロケーションであるその他の場合はどうか。彼の盗みの手口に範囲を限定しつつその状況に彼の盗みの腕の本質を見出した驚きを in、彼の大変な礼儀正しさに接して連続的に現われてくる驚きを on、これから何が起こるか分からないが何かが待ち構えている状況に向かった時の驚きを for、神 (=He) がある女性と話しているのを見るという状況と向き合った時の驚きを不定詞を表す to、ある男がポルシェを所有している状況からくる驚きを from によって、それぞれ表しているという分析が可能である。これらの形容詞+前置詞の組み合わせは必ずしも辞書に載っているわけではなく、またこの表現の読み手や聞き手がメンタル・レキシコンの中に確定した表現として格納しているものでもない。しかし、現実の言語処理においては、表現者側も聞き手や読み手の側も、これらの表現を自由に駆使できることは確かであるし、英語学習者もコアを直感的に使用できるような学習方略・言語使用方略を採用していれば、必ずしも表現者としてこれらの組み合わせが自由に駆使できなくても、聞き手や読み手の側になったときに、コアに立ち返って形容詞と前置詞の意味を融合することで、表現者の意味するところは理解できるものと思われる。

今度は、「形容詞+前置詞」のコロケーションの意味を探る試みとして、田中・佐藤・阿部 (2006) が扱っている「感情形容詞」のみではなく、感情形容詞を含む英語の形容詞全般についての議論を行ってみたい。

3. 「形容詞+前置詞」の共起性の一般論

3.1 英語の形容詞の概念分類

英語の形容詞全般に関して考察するためには、形容詞に関するすべての意味領域ないし概念領域を分類して、多数ある形容詞の配置を全体的に捉えなければならない。そこで、英語の形容詞の概念分類を行うに当たって、次のポイントを提示する (田中・河原・佐藤 2007, pp. 50-51)。

- ①主体の反応には、感覚的・理性的な次元、客観的・主観的な次元がある。
- ②評価の対象には、物、人、行為、状況、事象、情報、概念などがある。
- ③対象のどこに焦点をあてるか—外観、性質、価値などのどこを評価するのか。
- ④形容詞は、主体の反応を表すこともあれば、対象の属性を示すこともある。

これを前提に 10 の概念領域と各概念領域の下位分類を示すと、1案として以下ようになるだろう。

1. 視覚をもとにつかむ感覚：大きさ／広さ・太さ・濃さ／長さ・高さ・深さ・遠さ／色彩・明暗／清濁・美醜／形体・輪郭
2. 身体でとらえる感覚：肌ざわり／味覚／聴覚／方向／強度
3. 領域を仕切るためのラベリング：ジャンル／分類・区分／位置づけ
4. 比較：異同／固有／希少／普通
5. 時間の流れ：活動状態／成長・発展過程／前後関係
6. 価値判断：善悪可否／価値・効率・評価／真偽・正誤／必要性
7. 状況判断：難易／可能性／安全性・快適さ／複雑さ
8. 人の性格：賢さ・慎重さ／愚かさ・粗暴さ／優しさ・こまやかさ・親しきさ／正直さ・勇敢さ／厳格さ・律儀さ・内気さ
9. 内面的リアクション：確かさ／感情的リアクション／興味・関心・意識
10. 話題に応じて使われる形容詞：時間／速度／天候／能力／容器・密閉・密度／親疎・関係

概念領域とその下位分類は、大きなカテゴリーをいくつ設定するかによって体系が変わってくるだろうが、さしあたり、この体系で検討してみたい。

3.2 英語の形容詞の概念分類による前置詞との共起性の検討

各概念領域を代表すると思われる形容詞を1つ選択し、それと上記の前置詞 10 語をそれぞれ組み合わせ、検索エンジンで検索を行う。例えば、{"big at"}, {"big about"}, {"big by"}, ... という組み合わせである。選択した形容詞は次のとおりである。

1. 視覚をもとにつかむ感覚：big
2. 身体でとらえる感覚：hot
3. 領域を仕切るためのラベリング：medical
4. 比較：common
5. 時間の流れ：busy
6. 価値判断：cheap
7. 状況判断：safe
8. 人の性格：honest
9. 内面的リアクション：sure
10. 話題に応じて使われる形容詞：blind

検索の結果、以下のタイプに分類が可能である。

(ア) 形容詞と前置詞が共起せず、それぞれが別のチャンクを形成している場合

- Students turn out **big** / **at** the University of Michigan
- Now, these cookies are not **HOT** / **by** any means.
- Sounds are **common** / **at** night where large numbers of mice are present.
- They are **honest** / **in** examining their own failings.
- Santa Claus keeps **busy** / **by** writing back to all the children.

(イ) 形容詞と前置詞が共起している場合

- I am a fan of Blair Waldorf...which of course I am, but not THAT **big of** a fan!
- WHATS SO "**HOT**" **ABOUT** REFLEXOLOGY AND AROMATHERAPY?
- I have been like totally **busy with** school and stuff.
- Be **honest with** me.
- I'm not so **sure about** that.

(ウ) 共起する前置詞によって形容詞の意味が異なる場合（但し、上記 10 語以外から該当する形容詞を選んでいる）

- It is something that is very **true for** me. (…にとって本当だ) / This is particularly **true of** younger generations. (…に当てはまる) / He is **true to** his word. (…に忠実な)
- Our work is **concerned with** traffic planning. (…に関連している) / There's nothing to be

concerned about. (…を心配している)

- I'm **anxious about** my old age. (…を心配している) / We are all **anxious for** peace. (…を切望している)
- I'm not **good at** sports. (…が得意である) / Does Chinese sound **good to** you? (…にとって良い) / I feel **good about** the results. (…に満足な) / It was **good of** you to say so. (…が親切な) / I think I did **good on** my midterm. (…で良好な) / This passport is **good for** 10 years. (…に良い、効く)
- Singers must be **keen of** hearing. (…が鋭い) / The company is **keen on** downsizing. (…に懸命な)

(エ) 形容詞に前置詞が後続しない場合（但し、上記 10 語以外からも該当する形容詞を選んでいる）

- **medical** advice
- a **major** accident
- **public** affairs
- an **automatic** engine
- **middle** class (以上、強調は筆者)

ここに掲げた用例はあくまでも検索結果の一部ではあるが、「形容詞+前置詞」のコロケーションの学習方略として、具体的な説明を施してみたい（但し、(エ) は当該コロケーションを形成していないため、ここでは扱わない）。

(ア) の場合は、形容詞がその一部となっているチャンクと、それに後続する前置詞句であるチャンクは意味処理上、独立した場合である。例えば、Students turn out big / at the University of Michigan であれば、big と at の間に意味の切れ目が入り、big と at とは意味上はほとんど共起性が見られないといえる。したがって、このような場合は、それぞれのチャンクごとに従来の意味処理の方略で対処できる。

(イ) の場合は、形容詞と前置詞が意味的に共起性を多少有している場合であり「融合」によってイディオムの語義が推測できる場合である。例えば、big of a fan であれば、a fan という全体に対する部分を big が示しており、big of a fan はファンであるという状態性の大きな部分を占めるような、という意味合いから、大ファンであるということを示している。同様に、hot about は個別の意味は「熱い」、「周辺的な漠とした…について」であるが、これが融合することによって、「…について最新の、人気のある、話題の」といった意味合いになる。

(ウ) の場合は、形容詞と前置詞が意味的に強い

共起性を有しており、違う前置詞によって形容詞の語義も違ったものとして立ち現れてくる。例えば、true のコアは「事実に忠実に一致して本当の」であるが、for と共起するとある対象に向かって事実に一致していることを意味して「…にとって本当だ」、of と共起するとある対象から直接引き出される事実と一致していることを意味して「…に当てはまる」、to と共起するとある対象に向き合ってそれに対して忠実であることを意味して「…に忠実な」、という意味合いにそれぞれなる。concerned の場合であれば、concern が「関わり合いを持たせる」であるので、with と共起すると継続して何かに関わっていることから「…に関連している」、about と共起すると漠然と何かに対して心の関わりを覚えるという意味で「…を懸念している、心配している」という意味合いになる。anxious の場合だと、anxious が「気にかけて状態」を意味し、about と共起すると漠然と何かに対して気がかりな状態を表すので「…を心配している」、for と共起するとあるものを心理的に指差しながら気にかけて求めているニュアンスになり「…を切望している」という意味合いになる。このように「融合」の考え方でコロケーションの語義を考えていくことは極めて有効であると思われる。

3.3 「形容詞+前置詞」の共起性に関する理論

以上の分類を、今度はコロケーションに関してコーパスから分析する理論であるフレーズロジー (phraseology) の観点からとらえてみよう。ある語と別の語が偶然の確立以上に共起するフレーズをコロケーション (collocation) と呼ぶ (門田 2003, p. 246)。Schmitt (2000, p. 79) は、コロケーションの概念を4つのスケールで分類している。

level 1	idiom (frozen): kick the bucket / *kick the pail / *kick a bucket
level 2	fixed but transparent: break a journey
level 3	substitution possible with limited choices: give / allow / permit access to
level 4	two slots: get / have / receive a lesson / tuition / instruction

ある語の別の語との共起可能性は、別の語と置換不可能な固定した表現から別の語と比較的自由に置換可能なものまで段階的なものである (門田 *ibid.*, p. 247)。これは、「形容詞+前置詞」のコロケーションにも当てはまるであろう。この表と先ほどの分類とを対照させると、level 1=該当なし、level 2=

(ウ)、level 3= (イ)、level 4= (ア) となるであろう。但し、それぞれの範疇はグラデーションがあるため、どちらか判別がつかない事例も多くある。

近時のコーパス研究によるフレーズロジーの展開により、次のことが明らかになっている。言語には自由選択原理と非選択原理が働いている。自由選択原理では文生成は基底の規則体系システムに基づいて創造的になされる (チョムスキー的言語観)。非選択原理は、語と語の結びつきには一定の規則があり、言語使用者は単独で使える多数の半固定フレーズを記憶して使っていることを説明できる。語彙チャンクは非選択原理による (門田 *ibid.*, pp. 262-263)。

そして、このことは近時の認知言語学からも支持される。テイラー・瀬戸 (2008) によると、生成文法が基盤にしている、全体の意味が部分の意味の総和とその合成のされ方によって決まるという合成原理 (compositionality principle) は必ずしも妥当ではなく、イディオムはこの例外だと言える。しかし、だからと言って意味が分析不可能ということではなく、かなりの数のイディオムは意味的にも統語的にも分析可能 (予測可能) である。但し、全体の意味を算定することを可能にする一般的な規則は、完全に一般的であるのではなく、ある程度一般的であるにすぎない。規則の適用には周辺的な事例もあれば、まったく当てはまらない場合もあるので、どんなに一般的なルールであってもその適用範囲は学習されねばならない、としている (テイラー・瀬戸 *ibid.*, pp. 42-43, 330-335)

とはいうものの、「形容詞+前置詞」が共起した場合に、どのような語義として確定されるかは、上記のフレーズロジーや認知言語学からのイディオム性の研究から直接は引き出してくることはできず、結論的に言うと、第二言語習得上、上記 (イ) と (ウ) に関しては、形容詞の一般論として、「コア理論」から形容詞と前置詞の「融合」による語義の確定のメカニズムを学習および言語使用の方略として知っておくとは重要であると言えるであろう。

4. 結語と今後の展望

本稿は、感情形容詞と前置詞のコロケーションで有効な「コア理論」と「融合」という考え方を一般の形容詞と前置詞のコロケーションの学習方略・言語使用方略として適用するという試みを行ったが、あくまでも試論であって今後さらに精緻化した分析に基づいた体系の再構築をしてゆかなければならないことは確かである。

形容詞+前置詞のコロケーションに限らず、前述

のとおりイディオムの研究は、コーパスを土台にしたフレーズロジーからも、また認知言語学からも研究が進んでいるところである。特に認知言語学の立場からは、文法はつねにより一般的な規則と原理によって特徴づけられるのではなく、かなり個別的な事実の巨大な集積と見なされるべきで、個々の事実は様々なレベルのスキーマによって縦横に関連付けられており、イディオムは文法にとって周辺的、例外的であるどころか、まさに文法の中心を占める現象であると主張されている（テイラー・瀬戸 2008, p. 337）。そしてこの「個別的な事実の巨大な集積」を分析する上で、コーパス言語学は極めて有効であると思われる。そういう前提に立った上で、今後は「形容詞+前置詞」だけでなく、様々なタイプのイディオム研究を行ってゆき、第二言語習得上の学習方略を精緻化する必要があるものと思われる。

* * * * *

では、翻訳練習。山岡洋一「翻訳訳語辞典」から、true を例にいくつか掲載する。以下を参照されたい。
<http://www.dictjuggler.net/yakugo/>

true のコアは「事実に忠実に一致して本当の」。後続する前置詞の違いによって、「true+前置詞」のコロケーションの意味を考えながら、訳語を選択する、という手順。

1) In fact, the number of people who chose this path in ancient times is by no means small, and this is as true of the West as of the East.

☞ true of = 「～に当てはまる」 (of のコア = 「～から出ると同時に～に帰属して」)

2) True to his name, and as was his wont, he said it bluntly.

☞ true to = 「～に誠実な、忠実な」 (to のコア = 「～に向き合って」)

3) It was this bitter knowledge that his own father had refused him, said Fay, that had turned Frank into a restless man, bound for trouble, and unable to stay true to his own children.

4) This penchant for hard-time punishment became a pattern that would hold true for my brother for the rest of his prison career.

☞ true for = 「～にとって本当だ」 (for のコア = 「～に向かって」)

【出版翻訳の例】

1) 実際、古来このような理由で自ら命を絶った者は、洋の東西を問わず、少くないと思う。【出

典】土居健郎（著）・ハービソン（訳）『表と裏』弘文社 106 ページ。

2) その名にたがわず、いつものことながら無遠慮なものの方が良かった。【出典】クリスティー（著）・永井淳（訳）『フランクフルトへの乗客』ハヤカワ文庫 209 ページ。

3) 実の父親に拒絶されたという辛い思いがフランクをふらふらと腰の落ち着かない人間にしまったのだとフェイは言った。面倒ばかりおこして、子供に対する責任もろくにとれないような男に。【出典】ギルモア（著）・村上春樹（訳）『心臓を貫かれて』文藝春秋 117 ページ。

4) このような厳しい懲罰を求める傾向は、兄のその後の刑務所生活にもずっとあてはまることになる。【出典】ギルモア（著）・村上春樹（訳）『心臓を貫かれて』文藝春秋 235 ページ。

もう 1 語取り上げてみよう。keen のコアは「鋭いほどの集中力をもった」。true と同様にコロケーションの意味を考えながら、訳語を選択する。

1) She had been a kindly lady, understanding in every way, although sometimes he could feel she was not especially keen about his musical aptitudes.

☞ keen の「一点に集中して熱心な」という意味合いから、not keen で「熱烈でない、関心を見せない」という意味合いが引き出せよう。not があるため、about が後続する点が注目される。

2) [...] or perhaps I only thought so because it aroused memories of my young uncle who had been so keen on conjuring tricks all those years ago.

☞ keen は「一点に集中した鋭さ」がコア。その集中が直接及ぶ対象を on で表現している。

3) 'He was very keen on that bird,' Les said.

【出版翻訳の例】

1) 親切な人で、彼の音楽的資質にあまり寛大でないと感じることこそときおりあったものの、それ以外の面ではことごとく理解を示してくれていたそう。【出典】プリンプトン（著）・芝山幹郎（訳）『遠くからきた大リーガー』文春文庫 92 ページ。

2) それがむかし奇術に凝っていた若い叔父に関する追憶をひきだしてくれたからでもあった。【出典】北杜夫（著）・キーン（訳）『幽霊』新潮文庫 180 ページ。

3) 「あの鳥に夢中だったもの」とレスが言った。【出典】レンデル（著）・小尾美佐（訳）『死を誘う暗号』角川文庫 368 ページ。

註

- 1) たとえば、the discussion of the riots in the bar では、名詞が2つの前置詞句を従えているが、それらは主要部との結合の度合いが異なる。前置詞句 of the riots は、名詞との結び付きが強く、動詞句 discuss the riots の他動詞目的語と同じ働きをしている。一方、前置詞句 in the bar は修飾句であり、名詞との結び付きは of the riots とくらべると弱く、随意的な要素である。the discussion of the riots in the bar の of the riots のように、主要部との結合の度合いが強い要素を補部 (complement) といい、in the bar のように、主要部との結合の度合いが緩やかで随意的な要素を、付加部 (adjunct) という (以上、栗原・松山 2001, p. 5)。
- 2) PP (preposition phrase ; 前置詞句) 、NP (noun phrase ; 名詞句) 。
- 3) V (verb ; 動詞) 、N (noun ; 名詞) 、A (adjective ; 形容詞) 、P (preposition ; 前置詞) 。
- 4) 生成文法では、単語は素性の束であると考えられている。たとえば、talk は、/tɔ : k/と発音されるという音韻的な情報、補部として about と to の前置詞句をとるという統語的な情報、それに主語には人間を要求するという意味の情報などを、すべて素性として持っている。そして、主要な語彙範疇である名詞、動詞、前置詞、形容詞の範疇 (品詞) に関する情報は、動詞性[±V]と名詞性[±N]という素性の組み合わせによって表現される (Chomsky 1970) 。品詞を素性の束として分析することの利点は、範疇にまたがる一般化が容易になるということである。たとえば、4つの語彙範疇のうち、格付与能力があるのは前置詞と動詞である。この事実を V と P の素性の共通性を用いて、「[-N]の素性をもつ範疇が格付与能力をもつ」というように一般化することが可能となる (以上、丸田・平田 2001, p. 8) 。
- 5) 名詞句は、必ず格を与えられていなければならない。格を与えられていない NP は、不適格であるとして排除される。格を与えられていない NP を不適格として排除する規則を、格フィルター (case filter) と呼ぶ (Chomsky 1981) (以上、丸田・平田 2001, p. 46) 。
- 6) 田中 (1987, 1990) によるコア理論の考え方は、①習得面では、人は一般に、言語を使用して遣り取りを行う中で、常に言葉に対して意味づけを行いながら心的表象として概念を立ち上げる。そして、様々な文脈の中で繰り返し同じ語を経験する中で、概念の一般化を行いながら、概念を形成してゆく (差異化・一般化・典型化作用。詳しくは、

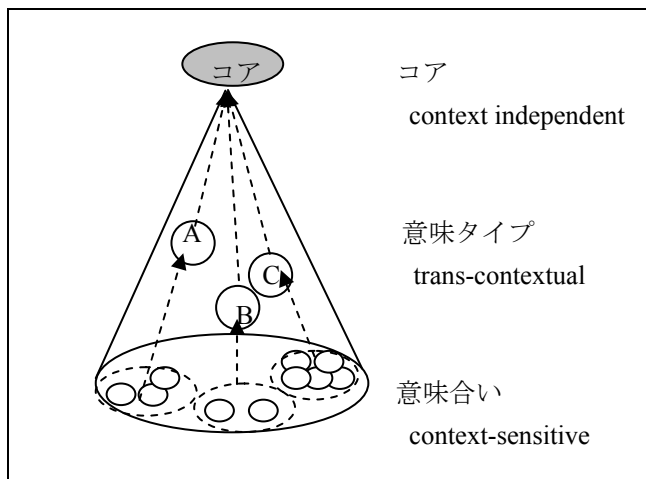
深谷・田中 1996, 田中・深谷 1998) 。この概念形成の過程の中で、まずは文脈の捨象を行いながら、文脈横断的な (trans-contextual) 意味の一般化を行う。これが「意味タイプ」と言われるものである。そして、さらに意味の一般化が進むところまで進んだ結果、コアを獲得する。この「コア」とは、「文脈に依存しない (context-free or context independent) 意味」を指す (但し、コアは言語使用者にとって通常は意識されない。詳しくは、田中・佐藤・阿部 2006) 。そして、②実際の言語の使用場面においては、この文脈に依存しないコアが文脈調整を経て、文脈に依存した (context-sensitive) 「意味合い」を得る、という考え方である (田中 1987, 1990) 。そして、このコア理論によると、多義派生メカニズム、つまり、語義の展開は、コア (特に、動作動詞と前置詞の場合は、コア図式) の投射・焦点化・回転・融合などという認知操作によって説明できるとしている (田中・佐藤・阿部 2006, pp.39-75) 。

この点、コア理論に対する批判も出ている。これには2つの方向性がある。一つは、初山 (2001) 、松中 (2005) のような、同じ単義説を採用するがゆえに差別化を図るための批判、あとひとつはタイラー・エヴァンス (Tyler & Evans, 2003) のような、語彙の習得面だけではなく使用面も考慮した (つまり手続的な面も考慮した) 意味の構造化を図ることを目的に、単義説では説明ができない長期記憶におけるメンタル・レキシコンの構造を反映した意味論を提唱するもの (決まった手順にもとづく多義説) の2つである。

まず、初山 (ibid.) は「ネットワーク・モデル」と「現象素」の統合モデルを提案し、コア理論を批判している。初山によると、田中が提唱するコアは、(1) 用例の最大公約数的な意味であり、かつ(2) 語の意味範囲の全体 (たとえ、おぼろげな輪郭であったとしても) を捉える概念であり (田中 1990, p. 22) 、この(1) はラネカーのスキーマに相当し、(2) は国広の現象素に相当する、として(1)と(2)が明確に異なる概念であることを確認しつつ、いわば(1)と(2)を融合したモデルを提唱している。ところが、田中の主張は、「意味は単純で曖昧であり、文脈化を経てその意味が明確化する」であり、(1)と(2)はいわば函数代入前と代入後の違いとしてみるべきであって、初山の批判は、意味の習得ないし使用のレベルの差を見落としていて失当である。田中の描くイメージ図は次の図のとおりである (田中・佐藤・阿部 2006, p. 8) 。

また、松中 (ibid.) はコア理論の意義は認めた上で、自身の唱える「中心的概念」の概念定義を行っているが、実質的には初山説と大差はない。

他方、タイラー・エヴァンス (Tyler & Evans 2003) の「決まった手順にもとづく多義説」(principled polysemy) の単義説に対する批判のポイントは、1つは、ある特定の語と結びついて異なる意味群が第一義的な抽象的意味と関連していることは十分に考えられるが、いくつかの意味は文脈から独立していることを実証的に指摘できる点、つまり、語用論的知識は重要な働きをするが、それだけではある特定の語と結びついて異なる語彙群のすべてを予測するには十分とはいえないこと。2つめは、意味構築の過程においては現実世界における語用論的・文脈的な知識が重要な役割を果たすという洞察は認めるけれども、言語使用者は形式と意味のはっきり区別される組み合わせを長期意味記憶の中に定着させていることが言語的証拠によって結論づけられていることも確かだ、したがって、意味構築の性質は動的かつ高度に創造的な過程であるとはいえず、すべての意味が状況的 (文脈的) 解釈の結果であるとはいえないこと、である (Tyler & Evans 2003; Evans & Green 2006)。しかし、これはあくまでも語の使用の手続面を意味構造論に組み込んだものであって、語固有の潜在的意味 (meaning potential) が異なるわけではない。この批判を受けて、コア理論をベースにした「手続意味論」を展開したものに河原 (2008) があるが、やはり語の意味構造を考える上で、手続面も考慮する方向で分析するのであれば、「手続意味論」(ないし、プロセス意味論) を正面から扱うべきであろう。以上は拙著・修士論文「ことばの意味の多次元性：“as”の事例研究」(未刊行)からの引用である。



参考文献

- Brugman, C. (1981) Story of “over.” Master’s thesis, University of California, Berkeley. (Pub. as *The story of over: Polysemy, semantics, and the structure of the lexicon*, New York: Garland, 1988.)
- Chomsky, N. (1970) Remarks on nominalization, In *Readings in English transformational grammar*, (ed.) by Jacobs, R.A. and Rosenbaum, P.S. pp. 184-221, Waltham, MA: Ginn.
- Evans, V. & Green, M. (2006) *Cognitive linguistics: An introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの<意味づけ論>』 紀伊国屋書店
- 門田修平(編著) (2003) 『英語のメンタルレキシコン』 松柏社
- 河原清志 (2008) 「言語のオンライン処理と語彙・構文のプロセス意味論—英語基本動詞の事例研究」『異文化コミュニケーション論集』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科(編) (pp. 121-134)
- 栗原和生・松山哲也 (2001) 『補文構造』 研究社
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Thing*, Chicago: University of Chicago Press.
- 丸田忠雄・平田一郎 (2001) 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』 研究社
- 松中完二 (2005) 『現代英語語彙の多義構造—認知的視点から— [理論編]』 敬愛大学学術叢書 7
- 初山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』1: 29-58 頁. ひつじ書房
- Pesetsky, D. (1995) *Zero syntax: Experiencers and cascades*, Cambridge: MIT Press.
- Rappaport, M. (1983) On the nature of derived nominals, In *Papers in lexical-functional grammar*, (ed.) by Levin, L. Rappaport, M. and Zaenen, A. pp. 113-142, Bloomington: Indiana University Linguistic Club.
- Schmitt, N. (2000) *Vocabulary in language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 瀬戸賢一(編集主幹) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』 小学館
- 田中茂範 (編著) (1987) 『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』 三友社出版
- (1990) 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』 三友社
- (1997) 「空間表現の意味・機能」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6) 1-123 頁 研究社
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『<意味づけ論>の展開』 紀伊国屋書店
- 田中茂範・河原清志・佐藤芳明 (2007) 『絵で英単語：形容詞編』 ワニブックス
- 田中茂範・河原清志・佐藤芳明 (2008) 『絵で英単語：前置詞編』 ワニブックス
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導：コアとチャンクの活用法』 大修館書店
- 田中茂範・武田修一・川出才紀 (編著) (2003) 『E ゲイト英和辞典』 ベネッセコーポレーション
- テイラー, J.R.・瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』 大修館
- Tyler, A. & Evans, V. (2003) *The semantics of English prepositions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法 7 形容詞』 研究社